操り人形感

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
操り人形感

【Ｎコード】
Ｎ２３６９Ｆ

【作者名】
谷津矢車

【あらすじ】
突然恋人に呼び出された「あたし」。待ち合わせた喫茶店に現れたのは明らかに憔悴していた恋人の姿だった。その恋人に憔悴の理由を問い質すのだが、恋人の口から語られたのは……。

＊

テーブルの上に置いてあるコップが、カランと鳴った。うだるような外気のせいか、コップはすっかり汗をかいていた。その汗が、喫茶店オリジナルのコップ受けを濡らし、その色をくすんだものに変えている。そのコップを少し触ってみる。指に集められた汗が水滴となって、コップ受けに吸い込まれて黒いシミになった。

弱い照明で照らされた店内には、ほとんど客がいなかった。平日の午前中なんていう時間帯なのだからしょうがない。真面目な学生は皆学校にいる時間だし、一方で勤め人は仕事に出ている時間なのだから、この時間帯に喫茶店にいるお客などロクな素性のものではない。見るに、暇そうな学生さんが2～3人いるばかりで、私の同年代にあたる人は居ないようだった。

海の底のように音が沈みきった喫茶店で、私は人を待っていた。

それは、私の彼だ。

昨日、突然彼氏からメールで連絡があった。「“明日の午前中、会えないか？　”」と。そのメールを見たとき、まず私はカレンダーを見た。平日の午前中に会えないか、とは、奇妙なことを言うものだ、と訝しく思ったのだ。だから、「“午前中？　仕事はどうしたの”」と返信した。私とは違って、彼は普通に勤め人をやっているのだ。すると、彼は再返信してきた。「“営業職についている人間の時間の都合なんて、どうにでもなるもんさ”」と。こうまで言われてしまっては、さすがに断る理由も見当たらず、こうして指定された喫茶店で待っているのだ。

とにかく、ひたすら目の前にある赤い液体が注がれているコップをいじったり、時計とにらめっこをしたりして、私は彼が来るまでの時間を潰した。

そうして、何度目かの時計とのにらめっこ中に、彼はやってきた。

カランカラン、と、まるで何個もコップの中の氷が鳴ったような音が響いた。久しく聞いていなかったので、それが喫茶店の入り口につけられている鈴の音だということに気づくのが遅れた。本当に最初はコップが鳴った音と勘違いしていたのだ。“おや、そんなにお客がいたかしら”と辺りを見渡して、入り口のドアが動いているのにようやく気づいたくらいだった。

そうして扉を開けてきたのが、彼だった。

黒っぽいスーツをまとっている。世の中とかくクールビズにうるさくなったらしいのだけど（私はまだ社会に出ていないので、よく分からないのだ）、彼の会社にその言葉が無いのか、それとも彼の流儀なのか、上着までしっかり羽織って、青っぽいネクタイをびっしり締めている。

彼は私に気づいたのか、手をヒョイと上げた。私もそれに応じる。

狭い喫茶店の、椅子やテーブルをすり抜け、彼はこちらにやってきた。途中、店員さんの「お一人様ですか？」という問いに、「連れがもう既に入っています」と丁重に答え、店員さんの厚意に応じた。

「悪いな」

彼の第一声がそれだった。

「何が？」

私が訊くと、彼は答えた。

「いや、いきなり呼び出したりして」

私と向かいの席に着いた彼。座るなり、上着を脱いで背もたれにかけ、上着のポケットから出したチェック柄のハンカチで額を拭った。今年彼は27歳のはずだけど（というか、私と同い年なのだけど）、いやに疲れて見えた。

「暑いね」

彼のハンカチが少し黒く変色するのを眺めながら、私は言った。

すると彼は笑った。

「夏だからな。しょうがないだろう」

彼は窓の外を眺めた。私もつられて外の景色に目を向ける。外の景色はまるでスポットライトを前面に投げかけているかのように真っ白で、均質な光景だった。きっと、“東京砂漠”という言葉はこういう景色のことを指すのだろう、と私はふと思った。

さて、その“砂漠”の旅人である私の彼は、いきなりこう切り出してきた。

「なんだか、疲れちゃってな」

窓の外に目を向けていたので、反応が一瞬遅れてしまった。最初、何かの雑音のようにこれらの言葉を聞き飛ばしてしまっていた。けれど、「え？　」と聞き返すことは何とかできた。それは本当に聞こえなかったからではなくて、さっきの言葉を心の中で反芻する時間稼ぎが欲しかったから発した言葉だった。

「なんだか、疲れちゃったんだ」

彼は重ねて繰り返した。

「疲れた？　疲れた、って、仕事が？　」

「ああ、そうかもしれないし、違うのかも知れない。分からない。とにかく、疲れちゃったんだ」

彼の口から、“疲れた”なんて言葉を聞くのは初めてだった。彼はいつも、仕事を精力的にこなしているようだったし、私と会う日だって、疲れた顔を見せたことがなかった。彼はいつも、疲れを知らないように見えた。

「……」

だから、黙っているしか私には手が無かった。

彼は、ため息をついた。そして、疲れたと言ったときの沈痛な表情を押しやってから、いやに朗らかな声で言った。

「いや、今の、なし！　忘れてくれ。　はは、最近ちょっと寝不足だからかな？　」

彼は、誤魔化そうとしている。その事に気づいた私は踏み込まなくてもいいところにまで踏み込んだ。

「いや、話して」

そう、本来なら踏み込んでしまわなくてもいいのだ。けれど、踏み込まないわけにはいかないのだ。
その私の決意を感じたのか、彼は困ったような笑顔を向け、がっくりと下を向いてしまった。
「話さなくちゃ、駄目かな」
彼はボソリと言った。
「そもそも、話すために私を呼び出したんでしょ？　」と、私は少々蓮っ葉気味に言葉を返す。「話して御覧なさいよ。そうすれば、少しは楽になるかもよ」
その時、店員さんが私達の席にやってきた。どうやら、彼の注文を取りにきたらしい。
彼は私のコップを指した。
「じゃあ、彼女が飲んでいるのと同じモノを」
「かしこまりました」
店員さんは何事かを伝票に書き付けてから、店の奥に消えた。
「そういえば、その赤い飲物、何？　まさかアルコールじゃないだろうけど」
彼はそう言った。彼はちょっと拙速に過ぎるところがあるのだ。
私は答えた。
「ああ、グァバジュース」
「え？　グァ、何だって？　」
「グァバジュース。南国の果物のジュースよ。……今日、暑いじゃない？　だから、メニューの中でふと目に留まったのよ」
「なるほど」
そんなやりとりの間に、彼のグァバジュースが運ばれてきた。コップ受けに置かれたそのジュースに挿されているストローで、彼はそのジュースを飲む。ストローを通って赤い液体が彼の咽喉に入っていくのを、私はふと想像していた。
「ああ、美味しいね、ちょっと青臭いけど」
「なら良かった。“青臭さが嫌い”って言う人もいるから」

そう言って笑いながら、彼の笑顔に誤魔化されて話の方向が少しずらされていることに気づいた私は、慌てて話の方向を元に戻す。
「で、どうして“疲れている”のよ」
「どうして、か」。彼はぽつりと言った。「別に、理由なんてないのかも知れないけど……」
「けど、とかいう言葉を使うのは止めてくれない？　」
「分かったよ」。彼は観念したように言った。「僕の疲れの正体ははっきりと判っているんだ。でも、それを口にするには、ちょっと感覚的過ぎる話なんだ。だから戸惑っているんだ。君だって知ってるだろ？　どちらかというと僕は理屈屋で、あんまり感覚的にモノを言わないことを」
私は頷いた。
彼は確かに理屈屋だ。例えば、彼と映画を見に行ったときに、その感想を彼に聞いてみると分かる。彼はこう感想を述べるのだ。「あのプロット、なかなかいいね。でも、あのキャラクターの動きがちょっと分かりづらいから、そこを変えればもっと感動できたはずなのに」と。もちろん、普通に映画を見て、普通に感動している私からしたら、「そんな野暮なこと、言うんじゃない！　」と言いたいし、事実そう噛み付いてはちょっとした喧嘩になる。それくらい、彼は理屈屋なのだ。にも関わらず、そんな彼が理論的に語れない、と半ば匙を投げていること。その事実に、妙な興味を持ってしまうのだった。
私は彼を宥めるように言った。
「感覚的だろうが何だろうがいいじゃない。とりあえず、話してみなよ。どんなに筋が通らなかろうが、私だけは受け止めて見せるからさ」
私は普段やり慣れない笑顔を彼に向けた。
彼は頷いた。
しばらく、彼は何も言わなかった。咽喉まで何かが出掛かっているのに、それが口から飛び出さない、そんな感じの沈黙だった。時

折、「……あ」とか、「だ……」とか、吐き出したい言葉の端っこが口から漏れ出てくるばかりで、その言葉の核心がまるで出てこない。

けれど、私は待った。この場面で私が動くだけ無駄だし、彼のためにならないのだ。それは、タマゴから雛が孵るとき人間があえて手伝わないのと似ている。助けてしまえば容易い。けれど、それは本人のためにならないのだ。

少し待って、ようやく彼は口を開いた。

「……あえて言うなら、“操り人形感”かな」

「アヤツリ、ニンギョウカン？」

聞きなれない言葉に、思わず仰け反る私。けれど、ここは踏ん張りどころだし、と私は彼の話を聞く体勢に入った。彼は続けた。

「うん、“操り人形感”。この言葉が一番しっくり来る」

「ちょ、ちょっと待って」

手でマリオネットを操るポーズを取りながら、私は続ける。

「ええと、“アヤツリニンギョウ”って、この操り人形のことよね？」

「そう」

彼は頷いた。

「ってことは」。と私は続ける。「“操り人形感”っていうのは操り人形みたいな感じ、ってことよね」

「そうさ」

「それって、どういうこと？」

私の問いに、彼は答える。

「例えば、朝、目覚めるとき。僕は目覚めがいいから、目覚まし時計なしに朝6時きっかりに目を覚ます。毎日毎日、朝6時に目を覚ます。そして横にある時計を眺めて、“おお、今日も6時きっかりに目が覚めた”って思っていたんだ。でも、最近、別の感想を持ち始めた」

彼はちょっとため息をついてから続けた。

「もしかして、僕が朝6時に目が覚めるのは、誰かに操られている結果なんじゃないか、って」
「それは、宇宙人に操られているとか、そういう話？」
「いいや」。彼は私の言葉に首を振った。「そんな、目に見えるものじゃない。もっと抽象的で、よく分からないもの。僕は無神論者だからなんとも言えないんだけど、きっと有神論者の言う“神”の感覚に近い存在に操られている、そんな感じだ」
「う～ん」
私は腕を組んでしまった。彼はそんなことにお構いなしに続ける。
「そう、最初は淡い感覚だった。でも、そのうち色々なことに気づき始めた。例えば、電車に乗るタイミング。会社で上司に怒鳴られるとき。仕事でクライアントに褒められたとき。あるいは、君と会ってデートしている瞬間。その全てに、どうしても“操り人形感”の影がちらついた」
「へえ、そうなんだ」
あえて冷静を保ちつつ頷く私。私としては、“デートしている瞬間まで操り人形感に襲われているのかよ”と毒づきたい気分ではあるが、そんな子供っぽいことを言うのもなんなので、むっとするに留めたのだ。
彼は続けた。
「その事に気づいたのが、約一ヶ月前。ごく最近さ。そしてごく最近、“誰かに操られている”っていう事実に気づいた瞬間、急に日々の暮らしに疲れてきたんだ。それはそうだよな。だって、誰かに操られながら生きているんじゃ何事にも張り合いがないじゃないか。心地よい疲れってヤツも、僕にとっては苦痛でしかない。だって、僕は僕のために動いているんじゃなくて、誰かの手足になって動いているようにしか思えないんだから」
操り人形は、あくまで見るものを楽しませるために踊っている。操り人形は、己のためには踊らないのだ。ふと、異国の石畳小路の脇で人形師に操られて滑稽な踊りを舞っている、哀れな操り人形の

ことをふと思った。
そんな想像を知る由もなく、彼は続ける。
「そう、“操り人形感”に襲われてからというもの、僕は疲れに弱くなったんだ。どうしてこんなに疲れながら、姿の見えない誰かのために僕は手足を動かしているのだろう？　例えば、僕を操っているのが君だったら、どんなに幸せなことだと思うよ。君に操られるなら張り合いがあるもの。でも、僕を操っているものは姿が見えない。それに、どういう存在かも分からない。もしかすると、“社会”に操られているのかもしれない。もしかしたら、“会社”に操られているのかもしれない。あるいは、“以前受けた教育”に操られているのかもしれない。こうやって“容疑者”はいくらでも挙げていくことが出来る。けれど、“犯人”には行き当たらない。そんな感じだ」
とにかく、彼は疲れている。私はそう思った。
彼の言うことは、よく分からない。でも、とにかく彼は疲れている。私が分かるのはその事実だけだった。
「なあ、助けてくれ」。彼は言った。「誰かに操られている、しかも、操っているのが誰か分からない、そんな状況でだ！　今こうして喋っている今でも、僕は“操り人形感”におののいているんだ。“誰かの筋書きに沿って喋っているんじゃないか？　”っていう疑問が、今にも頭に渦巻いているんだ！　」
遂に、彼は頭を抱えてしまった。

この件があってから、私は彼と結婚した。もちろん彼が好きだからだ。
結婚してから、彼の“操り人形感”は幾分形を潜めてきた。きっと、私という“目に見える操り手”の存在によって、彼の言う“姿の見えない”操り手の存在が彼の中で薄くなっていったのだ。
けれど、それは当然の事だと私は思う。だって、彼の言う“操り人形感”なるもの、そして私たちを規定して操る存在など、そもそ

も世界中のどこにも存在しないのだから。

＊＊

さて、賢明なる読者の皆様ならば、“彼”の抱えている“操り人形感”の正体に気づいているであろう。

蛇足だとは思うが、踏み込んで言ってしまおう。操り人形感に気づいている“彼”も、操り人形感という概念に対し最後まで理解を持てないでいる“私”も、チョイ役として出てくる“店員”も、さらに拡げてしまえば、彼らが生きる世界の全てのモノが、操り人形なのである。

どういうことか？

つまり、彼らが生きる世界を規定しているのは、今あなたが読んでいるこの文章の作者なのである。小説というものは（無論、暴論であることは明言しておかねばならないが）、“作者”という人形師が繰り広げる奇妙キテレツな人形劇に過ぎないのである。つまるところ、あの小説内において、彼らは作者である私の操り人形なのである。

例えば、作中で“私”と“彼”がグァバジュースを頼んでいるが、あれは“作者”という、彼らの世界における“神”によるバイアスの結果である。作者があそこでグアバシューズを出したのは、ただ単に最近東南アジアに旅行した作者が旅先で飲んだグァバジュースの美味しさに腰を抜かすほど驚いたから、というひどく個人的な理由からでしかない。

あと、『“誰かの筋書きに沿って喋っているんじゃないか？”っていう疑問が今にも頭に渦巻いているんだ！』と“彼”が独白しているが、あれだって至極当然、作者が考えた筋書きの上に乗っかって彼が喋っているのだから仕方がないことだ、と言える。

“彼”だけではない。“私”だって、無論それは同様である。

“彼”との対比のために“私”の性格は規定されたし、“彼”と“私”の救済のために、彼女の運命をも規定されてしまったのである。他ならぬ、作者によって。

さて、ここからは余談である。よって、適当に読み飛ばしていただいて結構である。

読者の皆様にも理解して頂けるとは思うが、“小説”には“作者のバイアス”がかかる。それは至極当然で、作者という存在が文章を紡ぐ際には、必ず作品内に作者なりの切り口が出てしまう。手癖と言ってしまえばそれまでのことだし、作者の味と言ってしまえばそれまでのことだ。では、ここで言う「手癖」「作者の味」とは何か？　もちろん、挙げていけばキリがないくらい色々の要素を挙げることができよう。ただ、その要素について卑近に述べてしまえば、「作品内に作者の体験した出来事が入り込んでしまう」点を挙げることが出来るだろう。

では、ここであえて問題を提起しよう。では、上記小説の中における「手癖」、すなわち、“作者の体験した出来事”とは何か？

それが“操り人形感”なのである。

作者である私は常に文章を書いているし、それが生業なのだが、時折思うことがある。“私は、どうやって文章を書いているのだろう？　”

実を言うと、作者はあまりものを考えて文章を書かない性質である。とりあえずキャラクターの性格や、そのキャラクターたちが生きる世界をおおまかに決めて小説を書くようにしている。なので、あまり頭を使って文章を書いているような小説家ではない。

だが、まるで泉のように言葉が湧いてくる。川の流れのようにプロットが整然と流れていく。自分ではほとんど小説世界のことを突き詰めていないのに、完成してみればそれなりのものに仕上がっているのである。

もしかすると、眼の前にある小説を書いているのは作者である私ではないのではないか、と思うことがある。それこそ、誰かに“操られている”のではないか、という疑問が頭を掠めることがあるのである。

白状してしまおう。

上記の小説を書いたとき、それこそ作者は“何かに操られたように”言葉を綴った。それこそまるで国会の議事録を記録する速記のように無感覚でいて素早く、原稿用紙の升目を埋めていったのだ。

私も、誰かに“操られている”のではないか？

そして、言おう。

今この文章を読まれているあなたも、“操られて”いやしないだろうか？

もちろん、「操られてなどいない。私は自由だ！」とお思いの方もいるだろう。だが、そうお考えの方は、ちょっと周りを見渡してみよう。自分以外の何者かの手によって自分が規定されているような感覚に、そのうち気づくはずだ。その感覚は本当に微細なものだ。日々の生活を過ごす我々にとっては聞き取れないほどに小さな音でしかない。だが、グァバジュースを飲んでいるとき、原稿用紙の升目を埋めているとき、一人眠りに落ちようとする晩などといったときに、不意に聞こえるときがある。まるで、合わせ練習をしているオーケストラの演奏中にカチカチ響くメトロノームの如くにクレバーに響く、操り人形感の足音が。

あえてもう一度、言おう。

今この文章を読まれているあなたも、日々の暮らしの中で、“操り人形感”に襲われていないだろうか？

（後書き）

蛇足ですが。
この話に出てくる“作者”　≠　矢車です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2369f/

操り人形感

2010年10月8日15時36分発行